



Sustainability



# 極東ロシア生物多様性とサケ資源利用を取り巻く日本・ロシアの問題



## カムチャッカの自然

カムチャッカ半島は、地球上で素晴らしい景観と手つかずの自然が多く残る場所だ。雄大な火山、間欠泉、温泉があり、非常に美しい光景が広がる。カムチャッカの大陸棚は、生物資源が驚くほど多様で、スケソウダラ、カニ、底魚などの豊かな漁場にもなっている。そして、太平洋の天然サケ類の四分の一が生まれる場所でもある。その多様性も豊かで、6種のサケ類が生息している。カムチャッカには、2つの自然保護区と4つの自然公園があり、カムチャッカの火山群としてユネスコの世界遺産に登録されている。こうした自然保護地域には、希少なトナカイ (Giant Wild Reindeer)、ユキヒツジ (Snow Sheep) の固有亜種、トドなど、たくさんの動物が生息している。

サケはカムチャッカの生物多様性にとって、とても重要な存在だ。その資源の減少は生態系全体に影響を与える。半島の南端にあるクリル湖は、アジア地域最大のベニザケの産卵域であり、これほどサケが密集する場所はめずらしい。ここには、大きなヒグマがエサとなるサケを求めて集まる。希少なオオワシもサケを目当てに数多く越冬している。



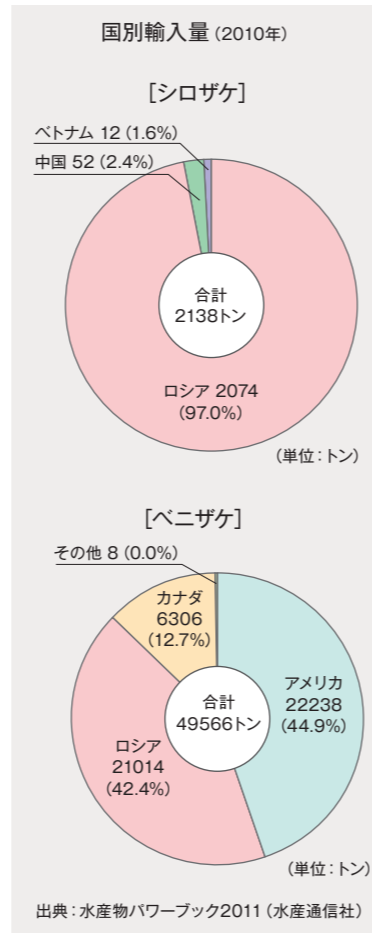
 私たちはWWFです  
人と自然が調和して生きられる未来を目指して、地球環境の悪化をくい止めるさまざまな活動を実践しています。  
[www.wwf.or.jp](http://www.wwf.or.jp)



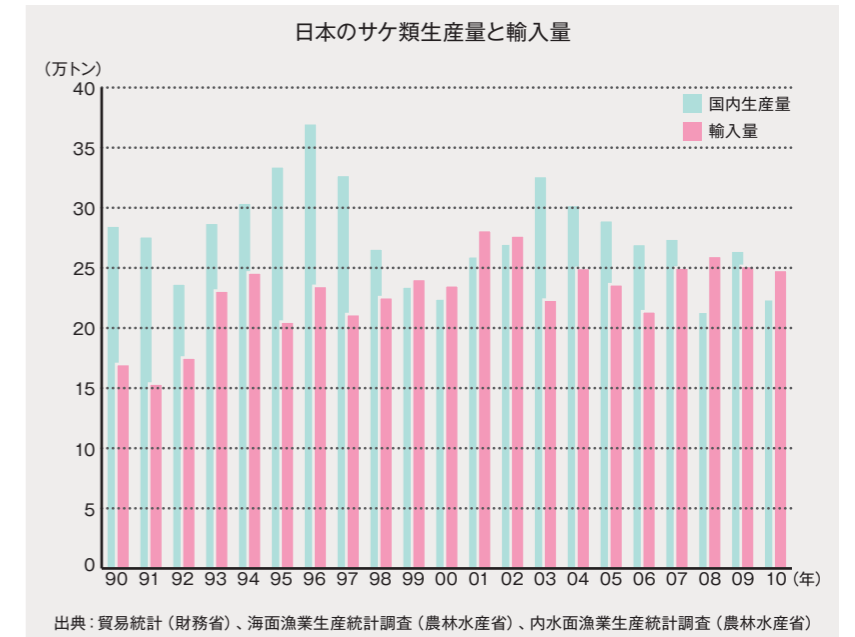
## ロシアや北太平洋諸国にとってのサケの位置づけ

サケの個体群は、食物連鎖にとって重要なだけでなく、カムチャッカ地域沿岸の経済にとっても重要な存在だ。また、厳しい気候条件の中で町から遠く離れて生活をする原住民の伝統的な暮らしや、その文化や歴史にサケは深く関わっている。

カムチャッカ水系におけるサケの総漁獲量は20万トンを超えるとみられているが、その大部分は毎年、日本をはじめとするアジア諸国に輸出されている。最新の調査では、2010年に、1万8千トンのベニザケと1千トンのシロザケがカムチャッカから日本に輸出されていることが明らかになっている。



極東ロシアからサケを多く輸入する日本市場においても、持続可能な調達を目指す取り組みが課題となっている。現在MSC(海洋管理協議会)などの第三者認証を取得したカムチャッカ産サケがないため、サプライチェーンにおけるカムチャッカのサケ漁業からのトレーサビリティを追うことができず、書類管理やその他の検証手段によって、合法的にとられたものであることを確かめることは極めて困難な状況だ。ロシアと日本の生産者、原料の調達企業や消費者の間で、透明性のあるトレーサビリティがないことで、将来的な水産物の安定供給に危機が訪れるかもしれない。太平洋のサケ資源と漁業の持続可能性を目指すためには、日本とロシア両国の力を合わせる必要不可欠である。



## 問題の解決に向けて

WWFは、極東ロシアのサケ資源利用を取り巻く問題の解決に向け、ロシアと日本両国で極東ロシアにおけるサケ漁業の管理体制を確実なものにするとともに、極東ロシア産サケの調達に携わる全ての企業が、責任ある調達方針を策定し、少なくとも合法的な生産や流通に由来する製品であることを客観的に確認できるシステムを構築することが必要と考える。こうした考えから、以下の解決策を提案する。

[解決策の提案]

- 責任ある漁業の行動規範と一致する、ロシア・日本両国のサケ漁業のモニタリングおよび監視の強化と規制措置に対する遵守徹底に貢献するよう、ロシア政府、日本政府、そのほか関係国協働のもと、IUU漁業<sup>(注)</sup>由来の製品の貿易を防止するために、日付、産地、生産手段を明記した漁獲証明制度を導入すること。
- ロシア政府による、ロシア国内におけるサケの漁獲配分量のモニタリングを確実にするシステム、ならびに生産量と輸出データを適切に管理、確認できるシステムを導入すること。
- 極東ロシアで生産されたサケ製品を取り扱う業者による、製品名、産地、漁獲日、取引および配送業者、取引日、数量・重量を含むロット番号など生産・取引に関する情報の適切な記録、管理に基づいた透明性のあるトレーサビリティを確立すること。
- 消費者による生産現場や市場での持続可能なサケ資源利用を目指した取り組みの奨励。また、問題意識を持ってIUU漁業由来でない極東ロシア産のサケ製品を確実に購入できるよう、生産や流通に対する働きかけを求めること。



<sup>(注)</sup> 法律やルールを遵守しない、無秩序な操業を、Illegal (違法)、Unreported (無報告)、Unregulated (無規制)の頭文字をとってIUU漁業と呼ぶ

## トレーサビリティの問題

日本とロシアには、サケ貿易と消費をめぐる長い歴史がある。1980年代以降、日本市場では、ロシア産の天然のサケに由来する製品の取り扱いが増加してきた。今日では、ロシアで生産されるシロザケの95%以上、ベニザケの約50%が日本市場にむけて輸出されている。大量のサケ製品が、日本を含め世界各国で消費されるようになり、過剰漁獲によるサケ資源への影響も心配されるようになってきた。一方、カムチャッカ産のサケに関するサプライチェーンの情報はほとんどない。業界の自主的な取り決めや政府による奨励もない中、極東ロシアを基点とする「漁船から食卓まで」のサケのトレーサビリティの確保が課題となっている。国際的なマーケットの中でも、カムチャッカでは、検証可能な形で適正に、かつ、持続可能な操業を行うサケ漁業からの調達を確立している事例はほとんどない。

